



怪我を機に私はこの生徒たちに一段と近づいた

徒と一緒に部活動に汗を流し、学校行事でも生徒会行事でも、常に生徒より一歩先んじて行動しようという気持ちがあり、事実、それがあつた程度まで実行できていたからである。

この怪我を機に私の生活のしかたや物の見方、考え方は徐々に変わつてきたよつだ。物事にあたる時の「氣負い」や、盲滅法突進していこうとする「無鉄砲」などころも少しずつ和らいできた。新幹線から鈍行列車に乗り移つた時のように、「ゆつたりと、旅」という毎日が過ごせるよつになつてきた。

例えば、以前のよつに、がむしやらに一つのことに熱中することが薄らいで仕事をするにも間をとつながら「の

んびりやればいい」と考ふるよつになつた。現在、この学校で二度目の一学年からの持ち上がりで、三学年の担任であるが、進路を決定する大事な時期であるにも拘らず、担任としての私の生活速度は以前の半分である。それでいて別段焦りを感じもしない。自分でも不思議に思ふ。

二つ目は、以前のよつにクラス運営や、生徒指導の面で氣負うあまり自分から先導する立場に立ち、望む結果が出ないと生徒を叱つたり強い指導を加える、という『先生臭さ』が姿を消しつたよつというこつだ。以前の熱つばい私自身は次第に冷めつたよつである。

自分を変えていくものは一体何なのか？年齢とともに失われていく「体力」と「若さ」がそれであり、「今までの教職経験から無意識に学んできたもの」も関係しているだろう。しかし、最近「自分の子どもが学校に通うよつになつて、『先生の目』に『親の目』が加わつて、物事や生徒たちが見られるよつになつたからではないか」と考へている。ともあれ、この「先生臭さ」が姿を消しつたよつある今、生徒たちと膝を交えて冷静に話し合ふ機会が多くなつたのは私自信の大きな進歩だ。怪我をしてから「禍転じて福となす」という諺が好きになつて、教ふる自信があつた。四回目の七月五日も過ぎ、就職試験も近い。さて、今年はこの生徒にこの言葉を贈らうか。

(県立猪苗代高等学校教諭)

## 教職に就いて

佐藤 奇子



私は十年間学校事務という仕事をしています。学校事務という仕事は、学校教育の裏方として学校運営が円滑に運ぶよつに条件の整備をするこつです。学校教育をわきから見てきて裏方に満足できなくなり、自分で直接やつてみたいと考へよつになり就職してから教職を志したわけです。

通信教育で教職の単位を取るために、レポートを提出しないといけないのですが、レポートがなかなか書けないので苦勞しました。そして、スクリーングに参加させていたただくためには事前に夏休み中の報告物の処理をし、給料等の支給準備を済ませて学校側の協力を得なければなりません。事務という立場にあつた私にとつて、教員免許状をとるといふことは、いろいろな苦勞もあり、つらい事もありました。何

度もくじけそうになりながらも、志を立ててせつかくこつまでやつてきたこつを無駄にしたくないという気持ちでなんとかこつまで来れたよつに思ひます。

採用試験の合格通知を手にした時は、「やつたあ」といふ感激で胸がいっぱいになりました。

教師になつて四月に矢吹町の中畑小学校に赴任しました。私は矢吹町にいてあまり知らなかつたのですが、初めて中畑小学校の門をくぐり出勤して感心したこつは、あいさつのすばらさと高学年生を中心とした自主的な奉仕活動です。JRCの研究指定校でもなかなかあいさつや奉仕活動を先生の指導なしに子どもたちが実行するこつはむずかしいのですが、中畑小学校の子どもたちは、やさしい心を持つていふるなあと感じています。

私は、学校で一番元氣な三年生を担任しています。男子十四名、女子十名で計二十四名です。男子が多いこつこともあると思いますが、学級はいつにもぎやかです。初めて三年生と対面した時の印象は、元氣よく明るい反面、落ち着きがなく授業中出歩く子どもがいたりして、「どうすれば落ち着きのあつる学級にできるだろうか」といふこつでした。落ち着いた学級づくりというこつで、一学期間いろいろと試行錯誤を繰り返しながら取り組んできました。努力のこつがあつてか、よやくよくよく落ちていきました。